

私はこう
考える

「感性の
豊かさを
育てる」
とは？

「感性」の意味 平田流解釈

平田智久

(大学教員)

感じて・考えて・行動する……中に「感性」がある

人は、感覚器官を駆使して身近なさまざまな情報や刺激を取り込みます。その情報や刺激を受け前頭葉で考えます。考えたことはいろいろな手段で行動します。その行動の結果を自ら見て触れて(感じて)満足したり、もつと〇〇したいと考えて、また行動を繰り返します。これは子どもに限ったことではなく、大人にもいえることです。

そうした行動の繰り返しを平田流に「内的循環」と名付けました(心理学的には内的ではない、と指摘も受けましたが)。感じ・考え・行動する……とい

う「内的循環」の繰り返しは日常的に行われていきます。カレーを調理している時も、炒めているニンジンの一つが大きければ、取り出して適当なサイズにして鍋に戻します。朝の洋服選びも、どうも上着とシャツが合わないと感じると、どちらかを変えてみたくなります。そうした行動が「内的循環」です。

感覚器官は人によって敏感な人も鈍感な人もいます。不具合な人もいます。でも感覚器官が単独で反応するのではなく、さまざまな感覚器官が受けとめた情報は脳幹に送られます。脳幹はご存じのように生命維持の重要な部位で、心臓のペースメーカーであり、情動(喜怒哀楽)もここから発信しているそ

うです。そうした情報は前頭葉で総合的に判断して
います。その前頭葉の動きこそ「感性」のスタート
のようです。

「内的循環」の『考える』部分は前頭葉が行います。
『考える』という言葉には『思う』という意味も含
んでいます。

子どもの様子で説明すると、登園してきたらす
でに友達が「ドロドロジュース」（カップの中に土と水
を入れ、かき混ぜてドロっとした液体）を作って遊
んでいた。↓それを見て「ほくも作りたい」と思う。
↓部屋にカバンを置き、砂場へ。↓早速「ドロドロ
ジュース」に挑戦。↓できたジュースは「シャブシ
ャブ」。↓「もつと土を入れればいいんだ」と考えた。
↓何度か繰り返し、思った通りの「ドロドロジュ
ース」が完成。そうした様子でもわかる通り、思うこ
とと考えることは重なり合っています。その意味で
両方を合わせて「イメージ」と呼んでいます。感
じ・イメージし・行動する……となります。

行動するとは、前頭葉の指令を受けて体中の筋肉

がさまざまに絡み合っ
てイメージの実現に向
けて動くことです。

無機質にロボットのよう
に動くのではありません。
「ドロドロジュース」の
事例で説明すると、イメ
ージ通りでないジュース
を見た時、「わあ違う」と
驚きの声や表情をしたこ
とが想像できます。手や
目ばかりでなくさまざま
に体中をコントロールし
て何度も作り直します。
思い通りにできた時は
「やったー」と気持ち
を表したに違いありませ
ん。つまり『行動する』
とはイメージに呼応して
行動することであり、
言葉も身振りも音も、も
ちろんもの（造形）も駆
使した総合的な行動です。
その意味からも「総合
的」なんです。また、子
どもの考えや思い、心の
様子が感じられる行動
ですから、「表現」ともい
えます。やつと本論です。
前頭葉からスタートして
行動に至るまでの流れを
「感性」と言いたいので
す。

「感性」の範囲について
お話ししましたが、続け
て「豊かさ」について説
明します。

ここでいう「豊かさ」とは、「イメージ」と「行動」の豊かさにはかなりません。さまざまに、いろいろと考えたり思ったりできることが「豊かさ」です。いろいろな方法で行動できることも「豊かさ」です。保育の中で好奇心を発揮している子どもも「感性の豊かさ」、作りながらイメージがどんどん変わっていく子どもも、オーバーアクションで完成を喜ぶ子どもも、たくさんお話を聞かせてくれる子どもも、みんな「感性の豊かさ」です。イメージ（考えたり思ったりできること）が幾つも浮かんでくる子、さまざまな行動で自分のイメージを伝えてくれる子どもがすてきです。そんなすてきな子どもに育つてくれることを願った保育がしたいです。

でも世の中には、「ああしろ、こうしろ」と、指示の多い保育もあります。「あのね……」という子どもの声に耳を傾けない保育者もいます。解剖学の養老孟司氏の「忘れないで欲しいのは、脳みそは総合なんだってことなんですよ。感覚を受けて、脳みそが計算して、その結果が体の動きとして出て、その

結果がもう一度感覚として入力されて……というふうに、脳は回っているんですよ。——中略——それが根本的な意味での『学習』なんです。」(『BEPAT』七月号 小学館 二〇〇八年 No.325) という文章を思い出します。見た目の美しさや、答えが合っている……という評価だけで人を決めつけてしまう社会はおかしいのです。

カクテルパーティー効果（選択注意）

この言葉は心理学で使われています。電車の中でもイヤホンの音漏れの音に反応して耳を傾けてしまう体験が、カクテルパーティー効果です。また、子どもたちの中でも虫が好きな子どもは、虫見つけが得意です。これはカラーエフェクト効果というそうです。どちらも、興味関心の高いもの・ことへ、脳を経由しないで直接感覚器官に働きかけてしまうことだそうです。そうした特殊な行為も人間にはあります。子どもにも反射的に行動することが多くあります。「落ち着がないのね」と子どもにもレットテルを

張る前に、人間らしさに感動することが重要です。

そうした特殊な状況もあることを理解した上で重要なことは、「イメージ」の源は「興味関心」であるということなのです。

子どもたちの「興味関心」に寄り添った保育であれば、感性を働かせた行動が期待できます。さらに強く「興味関心」を持った子どもがいれば、いっそう充実した保育が展開できるはずです。つまり保育者の子どもを見つめ、感じ取れる「感性」がキーポイントになります。

「みんな違ってみんないい」

「感性」について考える時、同じ状況にいても子どもたちはさまざまな反応をしてくれることを思い出します。また、昨日と同じなのに行動が違っていていることにも気付きます。そうした子どもたちの様子から、人の感性は常に変化しているといえます。つまり年齢、性別、興味関心、経験の有無、心持ち、体調……によって感じ取り方、刺激に対する反応のし

方が違います。大人にもいえますね。体調がいい時と悪い時とは違います。そうした日々変化する「感性」を受けとめる仕事は保育ともいえます。つまり「表現」という見方、考え方にポイントがあります。「表現」は、音楽でも造形でも、うまい下手……という結果主義ではないのです。「表」は意思を、「現」は内的な変化を示しています。その二つが重なって「表現」なのです。「感性」を感じ取るには、言葉にまらない子どもの思いや工夫しているところを見つめる、気付ける大人の存在が必要です。

ところが、金太郎あめのように同じ結果を求める保育が横行していることも現実です。「みんな違ってみんないい」のに……。

子どもたちはいつも身近なさまざまなことにアンテナを張り巡らし行動しています。まねして喜んで得意になったりを繰り返して育っています。そうした子どもたちの行動に心を寄せていける保育者でありたい、大人でありたいと思います。